



S U A C

静岡文化芸術大学ワーキング・ペーパー

SUAC Working Paper Series

登録番号：SUACWP-2024-002

マハバラタ版「二童敵討」

——バリ島のワヤン演目における二次創作の試み

Children Avenge Their Father: A Balinese Wayang Story Set in
Mahabharata

キーワード：、バリ、ワヤン、マハバラタ、二童敵討、創作、演目、

梅田英春 (Hideharu, UMEDA)

静岡文化芸術大学文化政策学部教授

発行日：2024年9月17日

本ワーキング・ペーパー・シリーズは、静岡文化芸術大学の研究成果をワーキング・ペーパーの形式にて公表することを目的とする。ワーキング・ペーパーの著作権等は著者に帰属し、その許可なく内容の転載や複製等は認められない。

マハバラタ版「二童敵討」—— バリ島のワヤン演目における二次創作の試み

梅田英春

はじめに

インドネシア、特にジャワ島、バリ島、ロンボック島において伝承されるワヤン wayang は、ユネスコの無形文化遺産に指定されている伝統芸能である。ジャワでは影絵人形芝居の形態の他、木偶人形芝居、板人形芝居もワヤンと呼ばれるが、バリ島とロンボック島のワヤンは、影絵人形芝居としてのみ上演される。

本稿は、バリの影絵人形芝居ワヤン演目の創作の規範に基づき、新たな演目を作る試みである。この創作の規範についてはすでに拙著（梅田 2021）の中で論じてきたが、バリ島における新しい演目創作は、その構造と内容の両方において、「既存の物語（本稿ではマハバラタ Mahabharata）」と密接な関係を持つ。

ワヤン演目の創作は、ダラン dalang とよばれる人形遣い自身が行うもので、台本作家がいるわけではない。ただし、ダランは自身のオリジナリティを追求した新たな創作をするのではなく、既存のマハバラタを基本に、いわゆる二次創作を行うのである。そしてバリの観客もまた、マハバラタに登場するおなじみの人物達が登場しない新しい物語を楽しむことはできないのである（Zurbuchen 1987: 231）。つまり、従来のモチーフの模倣、借用、並べ替えを非創造的とみなす西洋の文学や演劇の「オリジナリティ」という概念は、バリの創作演目の美学とは相反するものである（Zurbuchen 1987: 231-232）。

本稿では、初めに、バリのワヤンにおけるマハバラタの二次創作の概要について、先行研究とフィールドワークをもとに明確にしたうえで、沖縄の伝統演劇の一つである組踊の名作「二童敵討」をベースに、マハバラタ版「二童敵討」の創作プロセスを示した上で、カウイ kawi 語¹と日本語を用いて作成した台本すべてを掲載する。なおバリでは演目の概要を記録することはあるが、台本は作らずすべてアドリブで上演される。しかし本稿ではマハバラタ化した創作演目を明確に示すためにあえて台本化した。ただし実際にこの演目を上演する場合は、西洋演劇と異なり、台本を一字一句記憶するのではなく、その内容に沿っていればよいことから、あくまでも便宜的な粗筋の台本と考えている。

バリ島のワヤンにおける二次創作

バリ島の人形影絵芝居ワヤンの演目の中心になるのは、古代インドの大叙事詩であるマハバラタ Mahābhārata を起源としたインドネシア版のマハバラタであり、この物語の一部は 10 世紀末にジャワ島に繁栄したクディリ Kediri 王朝の君主であるダルマワンサ

¹ 本稿ではバリの演劇に用いられる古語をカウイ語と表記する。この言語について後述する。

Darmawangsa 王の命により古ジャワ語²で散文詩として翻訳されている。また物語の中の小さなエピソードを素材にして、11世紀にはカカウイン Kakawin とよばれる韻律詩が創作された。この韻律詩は、インドから伝播したマハーバーラタの二次創作であり、ジャワ独自の文学作品として現在まで伝承されている。いいかえれば、インドネシアにおけるマハバラタの一部はインドにおいて伝承されているマハーバーラタと全く同じ内容ではなく、原典にはないインドネシア独自の物語が今に伝承されているともいえる。こうして創作されたカカウインは、1293年から1527年の間、インドネシア地域全域を支配したマジャパイト Majapahit 王朝の時代に広く流布し、13世紀から14世紀に造られた遺跡、たとえば、東部ジャワのチャンディ・スラワナ Candi Sulawana の壁面には、11世紀に創作されたとされるカカウイン『アルジュナ・ウィワハ Arjuna Wiwaha』³、中部ジャワのチャンディ・スク Candi Sukuh、東部ジャワのチャンディ・テゴワンギ Candi Tegowangi 遺跡の壁面には、13世紀に創作されたとされる『スダマラ Sudamala』物語の一部が彫られているが、どちらもジャワにおける二次創作の物語である。



図1 チャンディ・スラワナ遺跡のレリーフ⁴
猪に変身した魔物モモシムカとアルジュナ
(『アルジュナ・ウィワハ』の一場面)



図2 チャンディ・テゴワンギ遺跡のレリーフ⁵
女神ドゥルガの前にひざまづくクンティ
(『スダマラ』の一場面)

² 9世紀から15世紀末まで主にジャワ島で用いられた言語。

³ クディリ Kediri 王朝アイルランガ Airlangga 王時代に、ンプ・カンワ Mpu Kanwa により書かれた最初のマハバラタの二次創作物語。アイルランガ王を描いた作品ともいわれている。マハバラタに登場する武将として知られるアルジュナ Arjuna が瞑想に行き、シワ神から武器を授かる物語はインド由来のマハーバーラタに記されているが、その後、アルジュナがインドラ神の世界に行き、ニワタカワチャ Niwatakawaca という魔物と戦い勝利し、その褒美として、インドラの妻スプラバ Supraba をはじめ、天女と結婚する話は、二次創作部分である。

⁴ 2024年8月11日、チャンディ・スラワナ遺跡にて著者撮影。

⁵ 2024年8月11日、チャンディ・テゴワンギ遺跡にて著者撮影。

このマハバラタを上演演目にする芸能の一つが影絵人形芝居ワヤンである。この芸能は上述のカカウイン『アルジュナ・ウィワハ』の中にすでにその存在が記されており（梅田 2020: 10-11）、現在と同じ人形や上演形態とは限らないが、影絵人形を鑑賞する芸能が、古くからジャワ島で上演されてきたことがわかる。

現在、バリの人形遣いダランは、インドネシアで書かれた散文体のマハバラタの内容、また数々のカカウインを題材にしながら演目を上演する。カカウインは既述したように、11世紀以降にジャワで創作された主にマハバラタ物語の二次創作であり、この演目はすでに歴史的に古くから存在していることから、バリのダランは、「木の幹、あるいは根の部分の物語（基本となる物語）carita unduk」とみなしており、カカウインもまた幹（原典）にあたるカテゴリーに含まれると考えている（Zurbuchen 1987: 215）。また樹木の比喩とは別に、基本となる物語を「親の物語 babon cerita」と表現し、創作物語は「子」とする見方もある（Sugita and Tilem Pastika 2023: 6）。つまり、バリのワヤンにおいてカカウインをもとに上演された演目は、創作演目とは考えずに、基本となる物語に基づいた上演であるとされる。

上記のようにバリの上演者は、さまざまな物語間の関係を語る際に、この木のイメージを使うことがあり、長い間、文書に記されて、広く知られるようになったカカウインを含む基本となる物語が、「幹」「根」であり、一方、個々のダランの創作は「枝 carangan」と考えられている（Zurbuchen 1987: 214）。

この「枝」に当たる部分がダランの創作演目である。この演目のことをバリでは、カウイ・ラン kawi dalang⁶ とよぶ（Rubin and Sedaba 2007: 17）。カウイの語源であるアウイ awi⁷はバリ語で「創作」を意味することから、直訳すれば「ダランの創作」となる。ジャワでは、創作演目のことを「枝」を意味するチャランガンとよぶが、バリでは、カウイ・ダランの他、創作演目をチャンタカ・パルワ cantaka parwa、あるいはケタカ・パルワ ketaka parwa、チェタカ・パルワ cetaka parwa とよぶ（Ensink 1967: 7）。チャンタカ・パルワは、実際に存在する物語集で、青山によれば、15世紀ないしは16世紀前半に成立したとされ、これは一種の百科全書的性格をもつ文献で、いくつかの物語の要約と古ジャワ語の語彙を集めた辞書的項目から成り立っているという（青山 1986: 6）。エンシングによれば、この物語集は実際にバリのダランがワヤンを上演する際にも用いられた可能性を指摘しているが（Ensink 1967: 14-17）、バリのダランの間では、現在、チャンタカ・パルワといった場合にこの物語集のことを指すのではなく、ダランが創作した演目を指す。エンシングは、地域によってもその名称が異なることを示している（Ensink 1967: 7）。筆者のインフォーマントの一人で、タバナン県のダラン、イ・ニョマン・ラジェグ I Nyoman Rajeg（1925-1999）は、ケタカ ketaka はバリ語で「武器を前後左右に振り回す」を意味するケタツ ketak を語源とし、こ

⁶ 市販のオーディオカセットで、入手できるもっとも古い新作ワヤン演目は、1970年代に発売されたイ・クトゥ・マドゥラによるダルマデワ Darmadewa であり、カウイ・ダランやチャランガンという用語は、この頃までに広く使われるようになった（Sedana 2015: 69）。

⁷ 接頭辞 k- が付くことで kawi となる。このカウイは、カウイ語とは別の語源である。

れは「牛が地面の美味しい草をあちこち移動して、首を左右にふって食べる」ように、「基本となる物語の創作にとって適切な部分を集めて、それを一つの演目に作り直す」という意味につながるという。一方、チャンタカ *cataka* は、古ジャワ語ではカッコウ目カッコウ科の鳥の名称で (Ensink 1967: 6-7)、この鳥も首を上下に振り、くちばしで木の幹にたくさんの穴をあけて餌をついばむ特徴を持つ。その意味ではケタツと共通した意味を持っていると考えられる (梅田 2021: 174)。

「二童敵討」の概観と場面構成

本稿では、創作演目の題材として沖縄の伝統舞踊劇として知られる組踊の演目「二童敵討」(別名「護佐丸敵討」⁸)を題材にし、マハバラタ物語の二次創作を行った⁹。組踊とは、琉球王朝において、中国からの使者である冊封使を歓迎するために1719年に上演が始まった芸能であり、台詞、演劇的な所作、音楽、舞踊で構成され、当時、琉球王朝の踊奉行であった玉城朝薫(1684-1734)が創作したとして知られている。玉城朝薫が創作した五演目は、「朝薫五番」として、現在でも親しまれている演目だが、その一つが「二童敵討」である。物語の概要は以下の通りである。

天下を手中に収めようと企む勝連城主である阿麻和利は、天下を取るための邪魔者である中城城主・護佐丸に逆賊の汚名を着せて攻め滅ぼす。その際に阿麻和利は、護佐丸の二人の子息、鶴松と亀千代(二童)も殺害したと思い込んでいたが、実際は落城の際、敵の目を欺き脱出し、母親のもとで育ったのだった。その後、成長した二人は阿麻和利が野遊びをして酒宴を開くことを聞きつけて仇討ちに向かう。二人は踊り手に変装し、母親から預かった父親の遺品である短刀を隠し持ち、酒宴を盛り上げる踊り手として阿麻和利に接近する。そして二人は阿麻和利を油断させて、その隙に仇を討つという物語である。

伊波普猷『琉球戯曲集』(1924)¹⁰に残された「二童敵討」の詩章(台詞や歌の歌詞になる部分)に基づく一般的な舞台構成は以下の通りである。

第1場 阿麻和利¹¹の登場

阿麻和利が舞台に登場し、中城城主・護佐丸とその愛児を含めた一族をすべて亡き者にしたことを喜び、この後、首里の都を攻め入るための障害がなくなったことを喜ぶ。そして阿麻和利は勝利の願掛けのために野遊びに行くことを家来に告げる。

⁸ 伊波普猷『琉球戯曲集』(1924)の中では護佐丸敵討となっている。

⁹ 筆者はすでに「朝薫五番」のうち『執心鐘入』をもとにマハバラタの二次創作を行い、その演目の上演経験がある。なおその内容については拙著(梅田 2021)に記した。

¹⁰ この戯曲集は現在の組踊上演の基本になっている詞章が収められている。詳細は鈴木 2023: 29-32 を参照のこと。

¹¹ 詩章では「あまおへ」と記載されている。

第2場 鶴松と亀千代の登場

鶴松と亀千代が舞台に登場し、鶴松が、父親である護佐丸は何の罪も犯していないにもかかわらず阿麻和利の陰謀によって殺され、さらにはその一族もほぼ殺害されてしまい、自分たち兄弟だけが母親の懐に隠されて逃げ延び、今は12歳と13歳であることを語る。さらに鶴松は阿麻和利が野遊びをすることを聞きつけ、父親の仇を討つことを提案する。

これに対して亀千代も、たとえ自身が討ち死にしても、国がある限り名声は残ることから、敵討ちに同意する。鶴松は母親に対して、敵討ちの許しを請う。

第3場 母親と二人の息子の対面

母親が登場し、三人の対面の場となる。母親は息子二人の願いを聞き入れ、亡くなった夫が身に着けていた短刀を渡し、油断しないように伝える。ここから親子の惜別の場面となり、母親は名残惜しさを残しつつ舞台袖に消える。残った二人は、いずれ阿麻和利の野遊びの場に行ったとき、場を盛り上げるための踊り手に姿を変え、阿麻和利を母親から授かった刀で刺し殺す策略について話をする。

第4場 阿麻和利の野遊び

春になり、木々や草が萌え出す季節、阿麻和利と家来は野遊びの饗宴を催し、酒を飲み交わしている。一方、阿麻和利から遠く離れた場所で、花々を楽しみながら鶴松と亀千代が踊りを楽しんでいる姿を見た阿麻和利はたいそう喜び、御前で踊るように命じる。

ところが鶴松は、自分たちは踊り手ではなく、ただ花を奏でながら踊っているにすぎず、阿麻和利の前で踊ることを拒絶する。しかし、家来に殺されたくなければ踊るように命じられ、二人は阿麻和利の御前で踊ることになる。

第5場 仇討ち

御前で踊る二人の舞踊を見た阿麻和利は、すっかり気を良くし、鶴松に饗宴の酒の酌をさせる。また次々に二人の子どもに刀などさまざまな持ち物を下賜する。

再び踊るように命じられた鶴松と亀千代は、繰り返し踊りながら阿麻和利に近づく。そして最後に、鶴松が、自分は阿麻和利に討ち取られた護佐丸の遺児であることを告げ、「逃がすまい」という鶴松のセリフとともに、阿麻和利と鶴松と亀千代は舞台袖に消える。仇討ちの場面は組踊では演じられない。

再び鶴松と亀千代が舞台に登場し、これまで念願だった親の敵が討てたことを語り、二人は踊りを披露し、舞台袖に消える。

二童敵討のマハバラタ化のプロセス

ダランが新しいマハバラタの演目を創作するための規則は明文化されているわけではないが、そこには暗黙の規範が存在している。

演目の創作にとって最も重要なのは、既存のマハバラタ（散文だけでなくカカウインも含む）との明確な関連性を持たせることにあり、創作された物語が、マハバラタの一部としてはめ込まれ、原典を知らない聴衆には、原典と創作の区別がつかない内容を持つことである。

この関連させる方法は大きく二つのパターンに分類される。一つ目は、既存のマハバラタに描かれているエピソードを膨らませ、その一部に新しい物語の展開や、既存の物語に登場しない新たな人物を登場させる手法である。二つ目は、既存の連続するエピソードの間に全く新しい物語を創作するパターンである（梅田 2021: 174）。

本稿の創作演目は二つ目のパターンに当たる。筆者は、この創作演目の時期を、マハバラタ第1篇アディ・パルワ *Adi Parwa* の中で、パンダワ一族がアヨディア国の半分を領土として譲り受け、その都の名前をインドラプラスタと命名したエピソード（Pendit 1980: 84）と、第2篇サバ・パルワ *Sabha Parwa* の最後において、パンダワ一族がコラワ一族とのサイコロ賭博に負け、インドラプラスタから追放されるまでの間（Pendit 1980: 108）、つまり、パンダワ一族がインドラプラスタにて国を統治していた時期に設定した。

マハバラタ版「二童敵討」の演目構成は以下のとおりである。なお、本演目で重要な三つの国名と国王名等の登場人物を最初に記す。

登場人物：

国名：カラン・グミラン *Karang Gumilang*

王名：ブラバケサ *Prabakesa*

国名：ジョングリン・サラカ *Jonggring Salaka*

王名：ウルン・ブワナ *Ulung Buwana*

王女：ウランドリ *Wulandari*

王子（二人）：ウィランジャヤ *Wiranjaya*、ブミンジャヤ *Buminjaya*

国名：インドラプラスタ *Indrapurasta*

国王（パンダワ五兄弟の長男）：ユディスティラ *Yudistira*

国王の弟（パンダワ五兄弟の次男）：ビマ *Bima*

天界の僧侶：ナラダ *Narada*

なおこの創作演目のために新たに命名した国名、登場人物は以下の意味を持つ。

国名のカラン・グミランのカラン *karang* は「場所」、*Gumilang*（語源は *gilang*）「喜び」を意味する古ジャワ語であり、「喜びが溢れる国」を意味する。また同じく、国名のジョングリン・サラカのジョングリン *Jonggring* は「島」（語源は *jong*）、サラカ *salaka* は「銀」を意味する古ジャワ語で、銀色に輝く島（ここでは島は「シマ」と解釈）を意味する。どちらも反映している国であることが国名からわかるように設定した。

王名のプラバケサの、プラバ peraba は「頭」、ケサ kesa は、「長い髪を登頂部に丸めて止める」意味である。ワヤン人形の中には男性でありながら、このような髪型を持つ武将が存在するため¹²、実際の上演ではその人形を用いる。王名のウルン・ブワナのウルン ulung は、「強い力」、ブワナ buwana は「世界」を意味する古ジャワ語で、強大な力を持つ王であることを名前が示している。

ウルン・ブワナの妻ウランダリのウラン wulan は「月」を意味し、dari は女性名の最後に着けることで「美しさ」を意味する。つまり「月のような美しい女性」という意味になる。この名前の女性は現在のインドネシアにも多い。

二人の息子の一人ウィランジャヤのウィラン wilan は男性の名前で、「友情に熱く、力強い男性」、ジャヤ jaya は「勝利」、ブミンジャヤは、マハバラタに登場し、パンダワとコラワー族の大戦争の中で非業の死を遂げる若き戦士の名前を借用している。

(1) プラバケサ王の謀略

カラン・グミラン国のプラバケサ王は、長いことパンダワ一族が治めるインドラプラスタ国の王になることを夢見ていた。そのため長い間、瞑想をして、神々からパンダワ一族を斃すことのできる強い力を得たのだった。

プラバケサ王は、まず、パンダワ一族に信頼が厚く、インドラプラスタ国に近い、ウルン・ブワナ王が治めるジョングリン・サラカ国を滅ぼそうと企む。プラバケサは、悪知恵を働かし、ウルン・ブワナ王が、インドラプラスタを滅ぼそうとしていると逆賊の汚名を着せ、それを未然に防ぐために攻撃するという大義名分を作り、出陣する。

(2) ウルン・ブワナ王の出陣

ジョングリン・サラカ国では、カラン・グミラン国軍の突然の越境攻撃に民衆は混乱して、逃げまどっている。ウルン・ブワナ王は、この攻撃がプラバケサ王の謀略と知りながらも国を救うために出陣する。

(3) ウルン・ブワナ王軍とプラバケサ王軍との戦闘

ウルン・ブワナ王は先頭に立ち、プラバケサ王の軍隊を自国の領地から追い出そうと試みるが、神から強大な力を得ているプラバケサ王には全く歯が立たない。ウルン・ブワナ王は、インドラプラスタの都を治めるパンダワ一族に助けを求めるよう王妃と王子たちに遺言を残し、その後、プラバケサ王の手によりウルン・ブワナ王は非業の死を遂げる。

(4) パンダワ一族への助力の依頼と仇討の許可

ウルン・ブワナ王の遺言に従い、国を逃れた妻ウランダリ王妃と二人の王子、ウィランジ

¹² バリ島の人形の髪型については梅田（2020: 30-35）にまとめた。

ヤヤとブミンジャヤは、インドラプラスタの都に赴き、パンダワ一族の長であるユディスティラ王に助けを求める。その理由を知ったユディスティラは、兄弟のうちで最も強い力を持つビマを大将とした軍の派遣を約束する。

(5) 仇討の許可と形見の刀の譲渡

ウランダリ王妃は夫の仇をとらせるべく、王子二人がビマ軍に同行する許可をユディスティラ王に願い出る。王子たちの従軍が許可されたことから、ウランダリは亡き夫が身に着けていた短刀を、仇討に使うよう息子たちに預ける。

(6) 互角の戦い

ビマ軍とプラバケサ軍の戦いが開始される。戦いは一進一退の攻防を繰り返し、最後にはビマとプラバケサの一騎打ちとなるが、決着がつかない。

(7) ナラダの秘策

戦場での膠着状態の状況を知った天界に住む僧侶ナラダは、インドラプラスタのユディスティラ王のもとに降臨した。ナラダはビマに「見せかけの敗走」をさせて、それを見たプラバケサが勝利を確信して大宴会を催す中、ウルン・ブアナ王の愛児二人を旅芸人の踊り手としてプラバケサ王のもとに送り、その舞に喜ぶ王が油断した隙に、二人に仇討をさせるよう助言する。ただし、子どもの力ではプラバケサ王を斃すことができないことから、ビマが助太刀をしてプラバケサ王のとどめを刺すように伝える。

(8) 見せかけのビマの敗走

ユディスティラの家来が伝令として戦場に赴き、ビマ「見せかけの敗走」の策を伝えるや否や、ビマ軍はすぐさま退却に転じる。これを見たプラバケサ王は勝利を確信する。

(9) 仇討ちと歓喜

プラバケサ王による祝宴の最中、旅芸人に姿を変えたウィランジャヤとブミンジャヤの二人の子どもが宴会の場に現れる。そして二人は、勝利を祝い、踊りを披露したい旨を伝え、それが許されると、二人は踊りを披露しながら徐々にプラバケサ王に近づいていく。そして、距離が縮まったところで、ふたりの息子はプラバケサの謀略により殺されたウルン・ブアナ王の遺児であり、仇討をすることを伝えて、懐に隠し持っていた短刀でプラバケサを刺す。それを見ていたビマは物陰から飛び出て、慌てふためき、負傷したプラバケサと戦い、最後に助太刀としてその鋭い爪でプラバケサ王の身体を切り裂いてしまう。

二人の子どもとビマは仇討ちの成功を喜び、母親の待つインドラプラスタの都に戻っていく。

以上が『二童敵討』をマハバラタ化した概要である。この演目がマハバラタの二次創作であることは、ユディスティラ王が治める都インドラプラスタとして登場すること、パンダワ一族のユディスティラとビマが登場すること、そしてビマが強靱な敵と戦い勝利で終わること、という三つの点で明確である。マハバラタの基本的な構造は、パンダワ一族あるいは、パンダワ一族に与する人物が勝利することであり、その「勧善懲悪」の規範通りの構造になっている。

こうしたパンダワの勝利以外にも、ワヤンの演目として重要な場面が創作されている。一つは、戦闘場面の挿入である。組踊はその特徴として戦闘場面を描かず、その結果のみを伝える手法をとる一方で、ワヤンはその演目展開の中で、激しい戦闘場面を必要とする。最終的には呪術などで勝利することはあるものの、例外なく、その演目の中には激しい戦闘場面があり、その結果としてパンダワ一族が勝利する構成が一般的である。そのために、本創作演目には、二度にわたる戦闘場面が挿入されている。一つは、プラバケサ王の軍隊とウルン・ブアナ王の軍隊の戦闘場面、そこには二人の王の壮絶な死闘が含まれる。もう一つは、プラバケサの軍とビマを大将とするパンダワ軍との戦いである。そして最終的には、ウルン・ブアナ王の二人の息子とビマにより、プラバケサ王は斃れるのである。

もう一点は、悲劇的場面、喜びや求愛の場面の挿入である。これらの両方が一演目の中に挿入される必要はないが、この創作演目では、夫を失ったウランダリの悲しみ、二人の息子と別れる悲しみの二つの悲劇的な場面、また最後の大会宴の中で、多くの女性たち、さらにはウルン・ブワナの二人の息子が踊る喜びを表現する場面が挿入される。

もう一つ重要なことは、この演目が、マハバラタの「幹」にあたる古くからある内容の要素を複数持っている点である。一つは、最初に見られる場面で、逆賊の汚名を着せて何の罪もない国を越境して攻め入るという点である。この内容は、マハバラタの中のウィラタ国の巻 *Wirata Parwa* の中にある。パンダワ一族と敵対するコラワ一族は、パンダワ一族が隠れていると思われるウィラタ国の人々が牛を盗んだ(牛の柵を破壊し、コラワ一族の牛をウィラタ国側に逃がしたのはコラワ一族である)という自作自演の悪事を理由にして、越境攻撃を行っている。この場面はマハバラタでも有名な場面であることから、本創作演目におけるプラバケサ王の軍隊の越境攻撃は、この場面を想起させるのである。

もう一点は、パンダワ一族による「助太刀」である。パンダワ一族とコラワ一族との大戦争(バラタユダ *Barata Yudaha*)の中で、パンダワ側で戦う女戦士シカンディ *Sikandi* は、前世の恨みを持ち続けるコラワ一族の老戦士ビシュマ *Bisma* と戦う。しかしシカンディは女性であるゆえにその非力によってビシュマを一人で斃すことができないことから、パンダワ一族の三男アルジュナが、シカンディの助太刀をする。この場面もマハバラタの中では有名な場面であり、「助太刀」はまさに、この場面を想起させるのである。これ以外にも、「バラタユダ」の中には仇討場面も多々散見される。仇討ちと助太刀は、マハバラタ物語にとっては不可欠なテーマといえよう。

このように、組踊『二童敵討』は、完全にマハバラタ化されて、まさに「幹」の部分から

派生した「枝」の物語へと姿を変えてしまうのである。そしてその物語は原典か否かの区別すらつきにくい演目へと変貌する。これがまさにマハバラタの二次創作である。

組踊「二童敵討」とマハバラタ版「二童敵討」の比較

本節では、組踊「二童敵討」のストーリーの展開を時系列で比較しつつ、マハバラタ版「二童敵討」の特長を明らかにしたい。なお、表に示した通り、場面を、「謀略」から「歓喜」までの11項目に便宜的に分割した。

表1 組踊「二童敵討」とマハバラタ版「二童敵討」のストーリー展開の比較

	場面	組踊「二童敵討」	マハバラタ版「二童敵討」
1	謀略	勝連城主阿麻和利は、琉球王朝を手にいれるため、中城城主・護佐丸に逆賊の汚名を着せる謀略を企む。	プラバケサ王は、パンダワ一族が治めるインドラプラスタの都とその領地を征服するために、近隣のジョングリン・サラカ国を攻撃する謀略を企む。
2	戦闘（1）	戦闘場面はなし。 護佐丸は戦死。 護佐丸の妻と二人の息子である鶴松と亀千代は逃げ延びる。	プラバケサ軍とウルン・ブワナ軍の戦闘。ウルン・ブワナ王の戦死。王妃ウランダリと、二人の王子、ウィランジャヤとブミンジャヤは国を逃れる。
3	援助の依頼	なし	ウランダリと二人の子どもは、パンダワ一族が支配する領地の都インドラプラスタを訪れ、ユディスティラ王に援助を依頼。
4	仇討ちの決意	鶴松と亀千代は仇討ちを決意し、母親の許しをもらう。	ウランダリは、二人の子どもに仇討ちをさせてほしいと依頼。
5	形見の刀の譲渡	なし	ウランダリは、夫の遺品の短刀を息子に渡す。
6	戦闘（2）	なし	ユディスティラの弟、ビマを大将としたパンダワ軍は二人の息子を連れて出陣。 プラバケサ軍と戦うが互角で決着がつかない。
7	秘策	なし	天界の僧侶ナラダの進言で、プラバケサを油断させるために、ビマ

			軍は敗北したと見せかけて退却。
8	形見の短刀の譲渡	護佐丸の妻の妻は、夫の遺品の短刀を息子に渡す。	なし
9	祝宴	阿麻和利は自身の野望の邪魔立てをする護佐丸一党を滅ぼしたことから、緑が芽吹く春の日に野遊びをして宴会を開く。	勝利に酔ったプラバケサは大宴会を開催。王や兵士は酒を酌み交わし、大勢の女性が祝いの踊りを披露する。
10	仇討	宴会の中、遠くで踊る鶴松と亀千代を呼び寄せて、踊りを楽しみ、さまざまな品を下賜。その後、踊りながら阿麻和利の傍まで行き、自身の身を明かした後、仇討であることを口上して、父親の遺品の刀で仇討を果たす。ただし、仇討の場面は劇中では演じられない。	宴会の中、旅芸人に姿を変えたウィランジャヤとブミンジャヤは、勝利を祝うための舞踊を披露する。その後、プラバケサ王に近づき、自身の身を明かした後、仇討であることを口上して、仇討のために、父親の遺品の刀で胸を突き刺す。
11	助太刀	なし	ビマが登場し、その鋭い爪でウルン・ブワナを切り裂く。
12	歓喜	鶴松と亀千代は仇討ちを果たせたことを喜び、踊る。	ウィランジャヤとブミンジャヤは仇討ちを果たせたことを喜び、ビマとともにインドラプラスタに戻る。

この表を見てわかるように、表中「1.謀略」の部分は、組踊、マハバラタ版創作演目ともに当時繁栄していた都を自身の領地にしたいという野望のために謀略を企てる、という点で共通している。

「2. 戦闘(1)」は、創作演目の特徴といえる。組踊では戦闘場面は演じられないが、戦闘場面はワヤンの上演構成には不可欠である。ここはプラバケサの謀略により、逆賊の汚名を着せて攻め滅ぼされたウルン・ブワナの非業の死を演じるワヤン独特の場面である。

「3. 援助の依頼」もマハバラタ版独自の場面である。ここで初めてマハバラタの二次創作には不可欠であり、勝利する側であるパンダワ一族が登場する。この存在により、この創作演目はマハバラタの二次創作となるのである。そして観客はこの先の展開、つまりパンダワ側の勝利、つまりプラバケサ王の死を想起することができるようになる。なぜならパンダワ側は正義であり、ワヤンでは必ず勝利する側に位置するからである。

「4. 仇討ちの決意」は、どちらにも共通するが、組踊では、遺児である鶴松と亀千代(二童)自身が仇討ちを決意し、母親にその許しを請うという展開である一方、マハバラタ版で

は、母親であるウランダリがパンダワ一族のユディスティラ王に仇討を依頼する展開である。ただし当然ながら、マハバラタ版においても、息子二人による仇討ちの願望と母親の同意が背景にあることが容易に想像できる内容であることから、その点においては組踊と同様である。

「5. 形見の短刀の譲渡」は、組踊、マハバラタ版の両方にある場面であるが、構成における位置が異なる。マハバラタ版では、ビマ軍とともに仇討に向かうウィランジャヤとブミンジャヤに母親から父の形見の短刀が譲渡されるが、組踊では、宴会が開催されることがわかる直前にこの場面が設定されるために、「8. 形見の短刀の譲渡」とした。

「6. 戦闘（2）」も「2. 戦闘（1）」と同様に、創作演目の特徴と言える。ここでは、決着がつかないプラバケサ軍とビマ軍の激しい戦闘が展開される。マハバラタ版の演目においては見せ場の一つである。

「7. 秘策」もまたマハバラタ版特有の展開部分である。人間界で起きる様々な出来事に対して人々が苦慮する時、神々に仕える僧侶たちが、その時々地上に降臨して人々に進言をするのである。この演目に登場するナラダは、シワ神の住む世界（シワロカ Siwaloka）に存在するが、ナラダの進言はシワ神の助言であり、言うなればナラダは、シワ神のメッセンジャーととらえることができる。

「9. 祝宴」「10. 仇討ち」は、組踊、創作演目の両方にとって仇討が行われる重要な場面である。組踊では同じ場所でありながら、別の宴で踊っている鶴松と亀千代（二童）を阿麻和利が呼び寄せる一方、創作演目では、旅芸人に変装したウィランジャヤとブミンジャヤが自分たちの意思で宴会に参加するという違いがある。マハバラタでは、自身の身分を隠し異なるキャラクターになることが多々あることから「変装」を行うこととした。仇討ちは、どちらも踊りながら近づく、という手法をとっている。大事なことは、どちらも仇討の直前に、自身の身分を明かす口上を行う点である。この時点で阿麻和利に対して、また観客に対して「仇討」であることを宣言するのである。

「11. 助太刀」はマハバラタ版創作演目だけに見られる特徴である。マハバラタの二次創作である以上、パンダワ一族の力による勝利という定型の様式をとることが重要であり、最終的には「助太刀」が名目であったとしても、パンダワ一族のビマの力によりプラバケサ王が斃される必要があり、それにより「パンダワ一族が勝利する」という典型的なワヤンにおけるマハバラタの二次創作演目となる。

「12. 歓喜」は、どちらも仇討を果たした喜びを表現する場面である。組踊では一度舞台袖に消えた鶴松と亀千代は、舞踊によって喜びを表現する一方、創作演目では、母親のウランダリに仇討ちの成功を伝えるためにインドラプラスに急ぎ帰る台詞に喜びを込めて表現する。バリのワヤンの場合は、「11. 助太刀」により、プラバケサが斃れたところで終演することも可能であるが、あえて組踊にある「歓喜」の場面を台詞により表現している。

この二つの物語の比較を通してわかることは、「姦計」「仇討の決意」「形見の譲渡」「宴会」「仇討」「歓喜」の6つの場面が共通している点である。ただし、マハバラタ版創作演目で

は、マハバラタ化するために、「戦闘場面」が加えること、さらにはパンダワ一族の勝利を演目中に挿入するために、「助太刀」としてパンダワ一族が活躍する点である。

こうして出来上がったマハバラタ版の創作演目は、「幹」の詳細な内容を知らない大半のバリ人から見れば、もはや完全にマハバラタ物語なのであり、古典文学によほど精通している人以外の観客はまずこの演目が二次創作と気づくことはない。ただし、この物語の「幹」の部分には、インドラプラスタに都を移したパンダワ一族の時代背景とパンダワ一族を妬む多くの王たちの存在があり、これはまさにマハバラタの原典の中に見られる記述である。つまり「幹」から誕生した「枝」の部分がまさにこの創作演目といえよう。

カウイ語と日本によるマハバラタ版「二童敵討」台本

(1) 台本に関する概観

バリのワヤンでは、一般に二つの言語が使用される。一つはカウイ語とバリ語である。古ジャワ語とカウイ語を同言語ととらえることもあるが、バリの芸能では古ジャワ語だけが使われているのではない。一方カウイ語は古ジャワ語や中期ジャワ語、サンスクリット語など複数の言語が組みあわされた言語であり (Zurbuchen 1987: 124)、語り手ごとの芸術に対する美的表現に基づき、他の言語と混合されているのである (Dibia 2012: 264)。それゆえ、本稿では、芸能で用いられる言語を古ジャワ語ではなく、カウイ語と表記する。

バリのワヤンの中では、プナサル *penasar* とよばれる従者、チョンドン *condong* とよばれる女官以外は、すべてカウイ語を用いるが、聴衆はこの言語を理解できないために、必ずカウイ語を語るキャラクターには従者が付き添い、その言葉を現地語のバリ語に翻訳し、さらには内容を補足する。またプナサルは、彼らだけの場面になると道化役者のように振る舞い、バリ語で自由な会話を展開する。つまりプナサルは、主人の言葉を観客に伝える忠実な従者であると同時に、ストーリー展開を説明するナレーターともなり、また観客を笑いの渦に巻き込む道化役者でもある¹³。

ただし、いわゆる「お笑い」の部分は上演時の雰囲気、観客層に合わせて、ダランがアドリブにより自由に展開するために、以下に示す台本には含めない。実際の上演が行われる場合はそうした部分が多々挿入される。なお、この演目においては以下の 6 種類のプナサルが登場する。

善側に位置するグループの従者は、トゥアレン *Tualen*、ムルダ *Merdah* の親子と決められている。この演目の場合は、ウルン・ブワナ王の従者として登場する。トゥアレンはバリの神話においてシワ神の兄弟とみなされており¹⁴、従者であると同時に、時には崇高な力を持つが、普段の行動はいわゆる「愚鈍」である。息子のムルダは常に父親を叱咤するような

¹³ プナサルの役割については、拙著「バリ島のワヤンにおける従者の性格とその役割」『Magis (桜美林大学大学院国際学研究所紀要)』1号 (1996年) に詳説している。

¹⁴ コバルピマス 1991: 267 を参照のこと。

しっかり者の性格である。

悪側に位置するグループの従者は、デレム Delem とサングット Sangut の兄弟である。本演目ではプラバケサ王の従者として登場する。ただし悪側の従者であっても、二人のキャラクターは「邪悪」というわけではなく、デレムはただ主人の言うことを盲目的に信じ、サングットはその行為が悪いとわかっていながらも、仕方なく家来として主人や兄に従うという性格を持つ。台詞にもそうした性格が反映される。

普通は善側、悪側だけで物語が展開するが、今回は、これに第三局としてパンダワー族が加わることから、ケブロン Kebrong とキムン Kimun という二人の兄弟が登場する。これは一般に民衆としての道化役（ボンドレス bondores）として用いられるが、今回はパンダ



図3 トゥアレン（右）とムルダ（左）



図4 デレム（右）とサングット（左）



図5 キムン（右）とケブロン（左）

ワー族の従者として用いる。

なお上演では、ト書きとプナサル以外のセリフはカウイ語を用いるために、そのままカウ

ィ語で表記した¹⁵。なおカウィ語の部分は、その後の（）の中に日本語訳をつけた。なお、プナサルの子はバリでは、観客が理解できる現地語であるバリ語を用いるが、日本で上演する場合には日本語を用いることから、この部分はバリ語ではなく、日本語で表記した。また物語の進行を補足説明する部分は〈〉を用いた。

(2) 台本

〔ト書き〕 **ダランの語り**：Caritanan, Raja haneng Prabakesa sira Karang Gumilang aranira, telas malama mahyun pinaka natha marikanang Indraprasta. Yayateku hetuniyan angelaraken kunang tapa bipraya amerihaken kawisesan sira wateking Dewata kabeh lamakana kasiddhan amejahaken Panca Pandwa.

Hana ta idepnira sira Maharaja Prabakesa pinaka pamukyaning naya-upaya bipraya angrusak negara Jonggring Salaka ri samipaning Indraprasta, kuwananira ratu mangaran Ulan Buwana, patik utama sira sang Pandawa kabeh. Ingkana kunang naya-upaya natan hana len, angawe wreta Sri Ulang Buwana bipraya amrajaya mwan angurugada lamakana sida basmi bhuta Indraprasta. Samangkanaa.

(訳：カラン・グミラン国のプラバケサ王は、以前からパンダワ一族の支配するインドラプラスタの都を支配する王になることを夢見ていた。そのため、長い瞑想をして、神々からパンダワ一族を斃すことのできる強い力を得たのだった。

プラバケサ王は、まず、パンダワ一族に信頼が厚く、インドラプラスタの都に近い、ウルン・ブワナ国王が収めるジョングリン・サラカ国を滅ぼそうとたくらんだ。ウルン・ブワナ王が、インドラプラスタを滅ぼそうとしているという嘘をでっちあげて、それを未然に防ぐために攻撃するという計画である。さて場面は、カラン・グミラン国、プラバケサ王と二人の従者の場面から始まる。)

【第一場】 プラバケサ王の謀略～カラン・グミラン国王宮

デレム：プラバケサ王にお仕えいたしますデレムが、王の命令により、王宮に参上いたしました。何かお困りのことはございますか？どうぞ何なりとお話しくくださいませ。

サングット：兄デレムと同様、王にお使いいたしますサングットが参上いたしました。

プラバケサ：Uduh Caraka Delem mwan Guludawa pwa kita, rengenakena ujarku mene. Ingulun wus angelaraken tapa marikanang giri, sira wateking Dewata mawehaken ikang wara nugraha, madurgama ikang kawisesaningulun mene. Ri mangkana yan agung kawisesanku, tatan hana paran-paran yan kasiddhan angawe sira Pranakesa sor kaya mangke.

¹⁵ カウィ語のテキストは、タバナン県タバナン郡トゥンジュク村のダランであり、タバナン県文化局職員のエ・ニョマン・ハルタヌガラ I Nyoman Harthanegara 氏の校閲のもと掲載した。

(訳：わが家来デレムとサングトよ。よく私の話を聞くのだ。私は長い間、深い森にて瞑想をし、神々よりパンダワ一族を斃すことのできる強い力を得ることができた。もうわたしには恐れるものは何もない。)

デレム：おっしゃる通りでございます。王はパンダワ一族が支配するインドラプラスタの都をわがものにするために、深い森にて長いこと瞑想をなさり、とうとう誰をも斃すことのできる強大な力を神々から与えられたのです。もう王は世界で一番強い王であり、王に刃を向ける敵はこの世にはいないのです。

プラバケサ：Mabener kaya sawakya-wakyanta. Nghing kewala, ingulun tan siddha anguragada marikanang Indraprasta yan tan hana wiwitaninya.

(訳：お前の言う通りだ。しかし、私が強大な力を神から得たからといって、理由もなくインドラプラスタの都を攻撃することができない。)

デレム：恐れながら申し上げます。しかしながら、たとえ王の強大な力を持ってしても、理由もなくインドラプラスタを襲うことはできないとのことでございますね。それではどのような方法を使うのでしょうか？

プラバケサ：Hana idep madurgama taya mene.

(訳：実はいい考えを思いついたのだ。)

デレム：インドラプラスタをわがものにする方法を、是非お聞かせくださいませ。

プラバケサ：Ingulun bipraya angawe naya-paya megawe wreta tan rahayu, sira Sri Ulung Buwana aranira, ratu ri samipaning Indraprasta mangaran negara Jonggring Salko, anrueaken ikang idep bipraya amejahaken wateking Pandawa. Ri mangkana, ikang swanegara Karang Gumilang bipraya anrugaken wateking Jonggring Salaka.

(訳：インドラプラスタの隣国のジョングリン・サラカ国、ウルン・ブワナ王が、パンダワ一族を殺そうと謀反を企んでいるという嘘を流すのだ。そして、その理由により、わが国はジョングリン・サラカ国を亡ぼすという魂胆だ。)

デレム：まさにご名案でございます。王は、インドラプラスタに近いジョングリン・サルカ国のウルン・ブワナ国王がパンダワを裏切り、王座を狙っているという謀略をでっちあげ、まずは、パンダワ一族の住む国の隣国ジョングリン・サラカ国を滅ぼしてしまうのですね。

プラバケサ：Yan sida angasoraken mwang amolihaken Jonggring Salaka, hetuniyan tan doh ikang Indraprasta. Sira kadi kami kasiddhan angawe yuddha ingkana marikanang Indraprasta sakama-kama idep ingulun.

(訳：ジョングリン・サラカ国を手に入れば、インドラプラスタはすぐ近くだ。いつでも攻撃することができよう。)

デレム：おっしゃる通り、ジョングリン・サラカ国を手に入れば、パンダワの住む都インドラプラスタはもう目と鼻の先。いつでも攻撃をすることができましょう。そしてわが王は必ずやインドラプラスタの都を治める王となるのです。もうあのインドラプラスタの都が我が国のものになるのは時間の問題でございます。

サングット：王様、おそれながら申し上げます。その策は間違っております。ウルン・ブワナ国王は、パンダワ一族の皆様にとっても信頼が厚い王ですし、多くの国民も彼を心から信頼しています。たとえ噂とはいえ、あの王がパンダワ一族を裏切るような謀反を起こすなど、誰一人信じないでしょう。どうか別の方法を考えてくださいませでしょうか。

プラバケサ： Meneng ta kita Guludawa. Ri kahanan ratu Ulang Buawana anameng Indraprasta, ingulun tan siddha amejahaken Pandawa. Yayeteku hetuniyan sira kadi kami wenang amrajaya ratuning Ulung Buwana katekatekeng patiknira pinaka pratamaning naya-upaya.

(訳：黙れ、サングット。ウルン・ブワナ王が、インドラプラスを守っている限り、簡単にパンダワ一族を亡き者にすることはできないのだ。だからこそ、まずはウルン・ブワナ王と家来たちを消すのだ。)

デレム：黙れサングト、弟の分際で勝手なことを言うな。いいか？ウルン・ブワナ王がインドラプラスの都を守っている限り、わが主人プラバケサ様はパンダワ一族を滅ぼすことはできないのだ。だからこそ、まずはウルン・ブワナ王と家来たちを亡きものにし、その後、パンダワ一族を滅ぼして、インドラプラスの王となるのだ。王様、さあ戦いの準備を始めてください。私デレム、そして弟のサングトもお供いたします。

【第2場】ウルン・ブワナ王の出陣～ブワナジョングリン・サラカ国王宮

〔ト書き〕ダランの語り：Mangkana kramanira Maharaja Prabakesa mwan wadwanira lumampah jumujuk maring Jonggring Salaka negara, bipraya amejahaken Sri Ulung Busana. Kawinursita mene marikanang Jonggring Salaka, parajana makabehan kagiat ri kahanan bala prawira Maharaja Prabakesa angawe rug ikang jagat, nimitanian melayu wateking Jonggring Salaka. Samangkana.

(訳：プラバケサ王と家来たちは、ウルン・ブワナ王を斃すために、ジョングリン・サラカ国に向かった。さて次は、ジョングリン・サラカ国の場面に移る。この国の人々は、突然のプラバケサ王の軍隊の攻撃に驚き、逃げまどっている。)

トゥアレン：いったい何が起きているのだ？なぜ、カラン・グミラン国の兵が我が国の国境を越えて、突然、我が国を攻めてきているのか？

ムルダ：私にもわかりません。たくさんの人々が逃げ惑っています。こんなところにいたら、私たちも殺されてしまいます。

トゥアレン：その通りだ。すぐにウルン・ブワナ王にこのことを伝えなければならぬ。

ムルダ：すぐに王宮に行きましょう。お父さん。

〈トゥアレンとムルダは王宮に参内する。〉

トゥアレン：わが王、ウルン・ブワナ様、今、わが国ではたいへんなことが起きています。突然、カラン・グミラン国の軍勢が国境を越えて我が国に押し寄せています。わが国民は、それに驚き、あちこち逃げ惑っているのです。どうかわが国を救ってください。

ウルン・ブワナ：Uduh Caraka Tualen. Suksekel juga haneng antawredayan ingulun, apan sira Maharaja Prabakesa amerangi Jonggring Salaka. Apan hana wreta dusta yan umucapa ingulun angawe naya-upaya bipraya amejahaken sawatek Pandawa.

(訳：私も心を痛めているのだ。カラン・グミラン国プラバケサ王は、私がパンダワ一族を斃そうと、謀反を計画しているという理由で、攻撃しているという。)

トゥアレン：わが王が、パンダワ一族を殺そうとしているなど、プラバケサ王による全くの作り話です。わが王は、誰よりもパンダワ一族を敬愛し、長きにわたりお仕えしているのです。そんなことは絶対にありえません。

ムルダ：そんな話は、プラバケサ王の作り話にすぎません。なぜ、彼はそのような嘘の話を作り、私たちの国を攻めるのですか？

ウルン・ブワナ：Sira Prabakesa mahyun kumawasaken ikang Indraprasta, yayateku krananira amerangi mwan amejahaken wateking Ulung Buwana, apan sira kadi kami pinaka tameng Pandawa mwan Indraprasta hetuniyan Karang Gumilang matingkah mangkana.

(訳：プラバケサ王は、パンダワ一族に代わってインドラプラスタを支配しようと考えているのだ。だからこそ、パンダワを攻めるために邪魔になる私たちの国を斃そうとしているに違いない。)

トゥアレン：プラバケサ王は、パンダワ一族を斃してインドラプラスタを支配したいと考えているのですね。そのために邪魔になる私たちの国を襲うなどもってのほか。許しがたい振る舞いにございます。その行為をなんとしても阻止しなければなりません。

ムルダ：王様、このままでたくさんの国民がプラバケサ軍に殺されてしまいます。ご出陣ください。そして敵を国外に追い返してください。

ウルン・ブワナ：Caraka, telas maweruha ingulun kaya saturanta. Mene enak pwa kita anginkinaken bala yudha prasama bipraya aperang tanding lawan sira wateking Prabakesa .

(訳：おまえたちのいうことはよくわかった。その通りだ。いまずぐ出兵し、プラバケサの軍と戦おう。)

トゥアレン：これより軍を率いてご出陣なさるのですね。もちろん、私たち家来もお供いたします。ムルダ、さあ行くぞ。

ムルダ：わかりました。お父さん。私も国のために戦います。

トゥアレン：さあ皆の者、ウルン・ブワナ王に続くのだ！

〈ウルン・ブワナ王とその家来たちは出陣する。〉

【第3場】 ウルン・ブワナ王の戦死～ジョングリッ・サラカ国の戦場

プラバケサ：Eiihh kita Raja Ulung Buwana, kita telas rumancana ikang naya bipraya amejahaken sapandawa kabeh. Samangkana, tan pariwangde ingulun amasmi bhuta wwang kadi kita.

(訳：ウルン・ブワナ王よ！お前はパンダワ一族を斃そうと謀反を企てようと計画している。その罪で、この俺様がお前を成敗する。)

デレム：ウルン・ブワナ王！おまえはパンダワ一族を殺そうと企てた極悪非道の輩だ。だからこそ、今、わが王はお前を退治するのだ。覚悟しろ。

ウルン・ブワナ：Carita mangkana telas ginaweaken tekapta wwang dusta. Kita angawe ikang carita dusta lamakana siddha angerugaken swanagaranku. Ri kapan juga ingulun tatan mahyun amawehaken swanagaranku ri kita.

(訳：そんな話はお前が作り出した嘘っぱちだ。お前はわが国を滅ぼすための嘘の理由をでっちあげたのだ。決して、この国はお前に渡さない。)

トゥアレン：そんな話はすべて嘘だ。作り話だ。すべてはお前が企てた陰謀にすぎない。お前は我が国を滅ぼし、その後にパンダワ一族を殺そうと企んでいるのだ。だからこそ、わが国を絶対にお前をわたすことなどできない。

プラバケサ：Akwéh ujarta. Tan wurungan pejah pwa kita tekap ingulun.

(訳：黙れ！お前はわが手で殺されるのだ。)

デレム：黙れ！黙れ！ほざくではない、お前はわが王に殺されるのだ。

〈戦闘の開始〉

〔ト書き〕ダランのセリフ：Caritanan, samangkana kahanan yuddhanira makarwa. Atemahan kanin sira Ulung Buwana. Dateng juga strinira mangaran Wulandari mwanng ranakira maka rwang sanak Wiranjaya mwanng Buminjaya aranira.

(訳：二人の激しい戦闘が行われ、ウルン・ブワナ王は深い傷を負う。王のもとに妻のウランドリと二人の子どもウィランジャヤ、ブミンジャヤが訪れる。)

ウルン・ブワナ：Uduh yayi strinku Wulandari mwanng nanak Wiranjaya, Buminjaya. Tan siddha ingulun anandingi saktinira Raja Prabakesa. Apan sira amolihaken ikang wara nugraha Dewata kabeh, matemahan tan siddha ingulun anandingi.

(訳：わが妻よ、そしてわが息子たちよ。私はプラバケサ王に太刀打ちすることができないのだ。彼は神々から強大な力を得ており、とても私は彼に勝つことができない。)

トゥアレン：ウランドリ王妃、そしてウィランジャヤ王子、ブンミジャヤ王子。わが国に攻め入るプラバケサ王は神から強大に力を授かり、とてもウラン・ブワナ王の力を持ってしても太刀打ちできないのです。

ウランドリ：Singgih kaka narendra, kadiang apa kita lumampah haneng ranangga yan

kinaweruhan bipraya angemasin pati? Kita telas prekasa aneng jurit. Kewala, inghulun mwang ranak inghulun makarwa bipraya malayu sakeng swanagara sadurung angemasakan paratra.

(訳：旦那様。なぜ、命を落とすとわかっていながら戦わなくてはならないのですか？あなたはプラバケサ王と立派に戦いました。ですから命を落とす前に、私と息子たちとともに、この国から逃れましょう。)

ムルダ：王様、もう立派に戦われたのではありませんか？なぜ、自分の命を犠牲にしてまで、戦い続けなくてはならないのですか？ご家族とともにこの国を離れてください。

ウィランジャヤ：Tulung, lah enak pwa kita peparang melayu lawan ibu. Tan kuwasa lumihat sira yayah paratra.

(訳：どうか、お母さんとともに逃げましょう。お父さんが戦死をするなんて、私はとても耐えられません。)

ブミンジャヤ：Singgih, yayah nora ta wenang kaprajaya.

(訳：もう十分戦ったではありませんか。殺される必要はありません。)

ムルダ：お二人の王子もいっしょに逃げて欲しいのです。さあ、もう負けを認めて国を離れてください。

ウルン・ブワナ：Uduh kita yayi mwang ranak ingulun, mas pinaka jiwatma. Ingulun wenang anamengi wateking Pandawa. Tan dadi mundur ingulun, yadiapi pejah yan rumaksa wateking Pandawa. Teki swaginan inghulun.

(訳：わが愛する妻と息子よ。私はパンダワ一族を守らなければならないのだ。パンダワ一族のために命を落としても後悔はしない。これが私の仕事なのだ。)

トゥアレン：わが王は、パンダワ一族を最後まで守らなければなりません。それがウルン・ブワナ王の使命なのです。だからこそ、パンダワ一族のために命を落としても後悔はないとおっしゃっているのです。

ウラランダリ：Singgih kaka, yan mangkana kaya sojar inganika, sang apa bipraya rumaksa wateking Pandawa?

(訳：もしあなたがここで斃れてしまったら、いったい誰がパンダワ一族を守るのですか？)

ムルダ：王様、もし王が戦死してしまったら、誰がパンダワ一族を守るのですか？誰がこの国の人々を守るのですか？

ウルン・ブワナ：Akweh kunang prawira paratra ingkene marikanang yuddha. Tan yogya ingulun sawiji mahuripa mene. Yeki titah ingulun aperang tanding lawan satru lamakana telas ikanang satru ri wekasan.

(訳：私のために多くの家来たちがこの戦いで命を失っている。私だけが生き延びることはできないのだ。最後まで敵と戦うのが王の務めである。)

トゥアレン：王妃様、王子様、この戦いでたくさんの家来たちが命を落としました。だから

王だけが生きて逃げ延びることはできないのです。最後まで戦うことは王としての務めなのです。

ウルン・ブワナ：Nghing kewala, hana pamintanku ri kita.

(訳：一つお願いしたいことがあるのだ。)

トゥアレン：国王は皆さまにお願いしたいことがあるそうなのです。

ウルン・ブワナ：Rengenakena. Maharaja Prabakesa juga mahyun amejahaken wwang kadi kita. Melayu pwa kita lumampah marikanang Indraprasta. Warahaken lawan Sri Yuddhisthira bancana yan katiba ri ngulun. Byakta siddha wateking Pandawa tumulungi wwang kadi kita. Siga sigra lumampah.

(訳：よく私の言うことを聞きなさい。プラバケサ王は、お前たちの命も狙っているはずだ。だからこそ、どうかこの場所をすぐに離れ、インドラプラスタの都を治めるユディスティラ王のところに行き、この出来事について伝えて欲しい。そうすればきっと、パンダワ一族の方々は、この窮地を救ってくれるだろう。)

トゥアレン：これ以上、ここにとどまるのはたいへん危険です。プラバケサ王は、王妃や王子の命をも狙っているはずです。ですから皆様方はすぐにここを離れ、インドラプラスタのユディスティラ様に助けを求めて欲しいのです。きっとパンダワ一族の皆さんが仇を討ってくれるはずです。

ウランダリ：Yan mangkana sadera kaka, ingulun bipraya ngwarahaken lawan sira Maharaja Yuddhisthira pinaka manggalaning Pandawa.

(訳：わかりました。必ずやこのことをパンダワ一族のユディスティラ様にお伝えいたします。)

ムルダ：ウランダリ王妃は、必ずこのことをユディスティラ様にお伝えいたします。ご心配にはおよびません。

ウランダリ：Lamakana jaya haneng payuddhan pwa inganika kaka.

(訳：あなたの勝利をお祈りしています。)

ムルダ：奥様は王の勝利を信じていられます。ご武運をお祈りいたします。

〈ウルン・ブワナ王は再び戦場へと向かう。そして激しい戦闘の末、ウルン・ブワナはプラバケサにより殺される。〉

トゥアレン：わが王は正々堂々と戦った。その命は必ず天に導かれるはずだ。

ムルダ：なぜ何の過ちも犯していないわが王が、殺されなければならなかったんだい？

僕には到底納得できない。

トゥアレン：お前の言うことはよくわかる。私も同じだ。しかし王妃や王子たちの悲しみはもっと大きいのだ。さあ、敵に見つかる前に国を離れてインドラプラスタに向かおう。私たちが王妃と王子を守るのだ。今私たちにできるのは王の遺言通り、王妃と王子をインドラ

ラスタの都に送り届けることだ。

【第4場】 インドラプラスタ王宮～パンダワ一族への助太刀の要請

〔ト書き〕 **ダランの語り**：Riwawu, telas pejah sira Ulung Buwana tekap sira Prabakesa, ikang atmanira jumujuk swargaloka.

Riwawu, telas pejah sira Jonggring Salaka tekap sira Prabakesa, ikang atmanira Ulung Buwana.

Mene, strinira Jonggring Salaka mwang ranakira makarwa lumampah marikanang Indraprasta maharep katemu lawan Maharaja Yuddhistira.

(訳：ウラン・ブワナ王は、プラバケサ王に殺されてしまったが、その魂は天に召された。さて、ウラン・ブワナ王妃ウランダリと二人の王子、ウィランジャヤとブミンジャヤは、急ぎインドラプラスタの王宮を訪れ、ユディスティラ王と対面する。)

ユディスティラ：Uduh wwang stri pwa kita, kangkadiang apa kita dating merangke? Enak warahakena saduga-duga lawan ingulun.

(訳：ようこそおいでくださいました。一体何があったのですか？ どうか私に何なりとお話し下さい。)

ケブロン：ようこそインドラプラスタの都においでくださいました。ところで、急のご訪問、何かあったのでしょうか？ユディスティラ王に何なりとお話し下さいますようお願い申し上げます。

ウランダリ：Singgih inganika Sri Maharaja, ksamaakena ri sadateng ingulun taya mene saka tembe. Aran ingsun Wulandari strinira Ulung Buwana. Yayateku makarwa putranku, Wiranjaya mwang Buminjaya aranira.

(訳：突然の訪問をどうかお許してください。私は、ジョングリン・サラカ国、ウラン・ブワナ王の妻、ウランダリと申します。こちらに控えますは二人の息子、ウィランジャヤとブミンジャヤにございます。)

トゥアレン：おそれながら申し上げます。まずは、突然の訪問をどうかお許してください。こちらにおられるのは、ジョングリン・サラカ国王、ウルン・ブワナ様の王妃ウランダリ様、そして後ろに控えておりますのは、二人の王子、ウィランジャヤ様とブミンジャヤ様にございます。実は王の命により、急ぎお伝えすることがあり、インドラプラスタの都に参上いたしました。

ウランダリ：Ri sadateng ingulun mene bipraya ngwarahaken lawan inganika, ikang swanagara Karang Gumilang telas inamuk tekap wateking Prabakesa. Matangniyan swamingulun kaprajaya de sira Ulung Buwana aranira, ratuning Prabakesa.

(訳：実はわが国にカラン・グミラン国のプラバケサ王の軍隊が突然攻め込んできたのです。そして夫はプラバケサ王に殺されてしまいました。)

トゥアレン：実は突然、カラン・グミラン国王、プラバケサの軍隊が国境を越えて突然攻め込んできたのです。プラバケサ王は、ウルン・ブワナ王がわがパンダワ一族に対して謀反を起こそうとしている根も葉もない噂をでっちあげ、ジョングリン・サラカ国に攻め込んできたといひます。もちろんあのウルン・ブワナ王が、何一つ間違ったことをするはずはございませんし、パンダワ一族の皆様を殺そうとしている計画などあるはずもございません。しかしウルン・ブワナ王はプラバケサ王に殺されてしまったのです。

ウランダリ：Tulungakena, tulungakena ikang swanagaranku singgih inganika Sri Dharmatmaja.

(訳：ユディスティラ様、どうかわが国をお助けくださいませ。)

トゥアレン：どうか、ジョングリン・サラカ国をお助けくださいませ。プラバケサ王の本当の狙いは、ジョングリン・サラカ国を自分の領土にすることではありません。皆様方パンダワ一族を滅ぼして、このインドラプラスタの王になることなのです。そのためにプラバケサ王は瞑想をして神々より強大な力を得ております。

ユディスティラ：Haywa kita sangsaya. Ingulun wateking Pandawa bipraya tumulungi pwa kita mwanng Jonggring Salaka. Ranteningsun mangaran Bima byakta kasiddhan amejahaken Prabu Prabakesa

(訳：心配はいりません。必ず私たちパンダワ一族が皆さんの仇を討ちましょう。そしてジョングリン・サラカ国をお助けします。私にはビマという弟がいます。彼なら必ずプラバケサ王を斃すことができるでしょう。)

ケブロン：心配ご無用です。パンダワ一族の皆様は、皆様方をお救いいたします。ユディスティラ様には弟のビマ様がおります。ビマ様は、これまで、一度も戦いで負けたことがないのです。ですから、必ずやご主人の仇を討ってくれるはずです。

ユディスティラ：Uduh yayi Wrekodara, merangke pwa kita parepeki kakanta taya mene.

(訳：ビマよ。こちらに来なさい。)

ケブロン：ビマ様、お兄様のユディスティラ様がお呼びです。こちらにいらしてください。

ビマ：Singgih kaka Sri Maharaja Yuddhistira. Kangkadiang apa, manawa ta hana karya yan katiba ri aku.

(訳：兄上、何かご用でございますか？私にできることあらば、何なりといたしましょう。)

キムン：ビマ様が参上いたしました。ユディスティラ様、さあ、ご用をお申し付けくださいませ。

ユディスティラ：Uduh yayi Wrekodara, yeki hana Prabu Prabakesa ratuning Karang Gumilang angerugaken nagara Jonggring Salaka mwanng amejahaken Prabu Ulung Buwana. Mangkana juga, sira si Prabakesa mahyun amejahaken wateking Pandawa kabeh.

(訳：カラン・グミラン国のプラバケサ王が、ジョングリン・サラカ国を攻めて、ウルン・ブワナ王を殺したのだ。しかもプラバケサ王はわれわれパンダワ一族の命も狙っているという。)

ケブロン：ビマ様、実はカラン・グミラン国のプラバケサ王が、何の過ちも犯していないジョングリン・サラカ国を攻めて、ウルン・ブワナ王を殺してしまいました。しかもプラバケサ王はわれわれパンダワ一族を滅ぼして、このインドラプラスタを支配しようと企んでいるのです。

ユディスティラ：Yayi Wrekodara, sigra-sigra pwa kita aperang tanding lawan Prabu Prabakesa. Yan tan mangkana tan nemu ikang kerahayon juga Indraprasta yeki.

(訳：ビマよ、すぐにプラバケサ王を討て。そうしなければ、このインドラプラスタも危険にさらされるのだ。)

ケブロン：ビマ様、これはユディスティラ様のご命令です。今すぐ、プラバケサ王を斃すためにご出陣ください。そうしなければ、このインドラプラスタも危険にさらされるのです。

ビマ：Singgih kaka Yuddhistira, yatna sira Bhimasena lumampah mene kadi kon inganika. Ingulun byakta kasiddhan angasoraken Prabakesa. Samangkana kaka.

(訳：兄上、かしこまりました。これより出陣いたします。必ずプラバケサ王を斃します。ご安心ください。)

キムン：ビマ様は必ず、プラバケサ王を斃し、インドラプラスタに戻ります。王妃様、王子様、どうか安心してこのインドラプラスタでお待ちください。

ウランダリ：Singgih inganika Maharaja Yuddhistira mwanng Arya Wrekodara, meneng inganika rumuhun. Hana pamintan ingulun lamakana sang Bima umawa juga putranku makarwa? Lamakana siddha ngwales dosanira Prabakesa. Kewala ksamakana atur ingwang.
(訳：ユディスティラ様、ビマ様、しばしお待ちくださいませ。私の二人の息子もお連れいただけないでしょうか？息子たちに父の仇を討たせたいのです。どうかわがままをお許してください。)

トゥアレン：ユディスティラ様、ビマ様、実はウランダリ王妃が皆様にお願ひがあるのです。王妃は二人の王子に父親の仇を討たせたいのです。ですから、二人の息子を戦場に連れて行って欲しいとおっしゃっています。どうかお聞き届けいただけませんか？

ユディスティラ：Yan mangkana, tatan sangsaya juga. Kewala kita makarwa wenang tumut kayeng pakon sira Bhimasena, apan si Prabakesa dahat mawisesa.

(訳：わかりました。ただし、ビマの命令に従ってください。プラバケサはとても強いのですから。)

ケブロン：王妃様、ユディスティラ様はお二人の王子の従軍をお許しになりました。ただし、戦場ではビマ様の命令に必ず従うようにとのことです。なぜなら、プラバケサはとても強いいため、勝手な行動は命取りになるからです。

ウランダリ：Singgih Maharaja. Mene enak pwa kita makarwa yatna-yatna bipraya jumujuk marikanang rananggana lawan Arya Wrekodara.

(訳：ユディスティラ様、わが願ひをお聞き届けくださりありがとうございます。さあ息子たちよ。ビマ様とともに戦場に向かう準備をするのです。)

トゥアレン：ユディスティラ様、王子のお同行をお許しいただきありがとうございます。さあ、お二人の王子、戦いの準備をしてビマ様と戦場に向かい、お父上であるウルン・ブワナ王の仇討を果たすのです。

【第5場】 インドラプラスタ宮廷～形見の刀の譲渡

〔ト書き〕 ダランの語り：Warnanan, ri mangkana kramanira Bhimasena mwang parajurit prasama lumampah bipraya amrasta Prabakesa. Mene, Wulandari amawehaken ikang curiga Ulung Buwana lawan ranakira. Pinaka sarana amejahaken ikang ripu.

(訳：ビマと家来たちは、プラバケサ王を退治するために出陣した。さてウランダリは二人の息子に、夫の形見である短刀を渡し、その刀で仇を討つように二人の息子に命じる。

ウランダリ：Uduh anakku prasama. Hana pamintanku ri kita.

(訳：わが息子よ。お前たちに一つのお願があります。)

トゥアレン：ウィランジャヤ王子、ブミンジャヤ王子、お母様は二人に願があるのです。よくお聞きください。

ウランダリ：Yeki hana ikang curiga pawehan yayahta ri nguni. Yeki ikang curiga pinaka sanjatanta amejahaken Prabakesa haneng dlaha.

(訳：これはあなたたちの父上が大事にしていた短刀です。これをお前たちに授けます。そしてこの短刀でプルバケサ王の命を奪い、父の仇を討つのです。)

トゥアレン：お母様がお持ちの短刀は、あなたたちの御父上、ウラン・ブアナ王が身に着けていたものです。その短刀をお二人に授けるとのことにございます。そしてその刀でお二人は憎きプラバケサ王の命を奪い、仇討を果たしてほしいとお母様はおっしゃっております。

ウィランジャヤ：Singgih ibu. Samangkana ksamakanen yeki si Wiranjaya, bipraya ngewalesakena, pinaka sarana tatan hana waneh sanjata hru.

(訳：お母さん、わかりました。必ず、この矢で憎き父の仇を討ちます。)

ブミンジャヤ：Singgih ibu, ingulun bipraya ngwalesaken ri patining yayah lawan rantenku yeki.

(訳：必ず兄とともに仇討を果たします。)

ムルダ：ウランダリ王妃、お二人の王子は必ずあなたの夫の仇を討ちます。安心をしてこのインドラプラスタでお待ちください。

ウィランジャヤ、ブミンジャヤ：Yan samangkana, sigra-sigra lumampah ingulun mene.

(訳：それでは行ってまいります。)

ムルダ：さあ王子、仇討のため戦場へまいりましょう。

【第6場】 戦場

〈ビマ軍とプラバケサ軍の激しい戦闘が始まる。しかし強大な力を持つプラバケサとビマ

は、激しい一騎打ちを繰り広げるが、決着がつかない。〉

.ビマ：Aduhh caraka, tatan siddha aku amejahaken Prabakesa. Kangkadiang apa ta molaha mene caraka?

(訳：どのような方法でもプラバケサ王を斃すことはできない。いったいどうすればいいのか?)

ケブロン：ビマ様、プラバケサ王は、われわれパンダワ一族を斃す力を得るために深い森で長いこと瞑想をして、その成功の暁に、神々からとてつもない強大な力を得ています。ですからビマ様の力を持ってしてもどうすることもできないのです。

〈再び両軍の終わりなき激しい戦闘が再開される。〉

【第7場 インドラプラスタ王宮】

〔ト書き〕ダランの語り：Caritanan, marikanang Swarga sira Bhagawan Narada lumihat ikang yuddha, lumampah mene marikanang Indraprasta atemu lawan sira Yuddhistira.

(訳：天界から様子をはかっていた僧ナラダは、インドラプラスタを治めるユディステイラ王のもとを訪れる。)

ユディステイラ：Singgih inganika Bhagawan Narada, kangkadiang apa inganika dating merangke?

(訳：僧侶ナラダ様、どうしてインドラプラスタにいらっしゃったのですか?)

トゥアレン：僧侶ナラダ様、おそれながら申し上げます。なぜ突然、インドラプラスタにおいでなされたのでしょうか?

ナラダ：Uduh kita nanak Sri Yuddhistira, mene sira Arya Wrekodara sedek aperang lawan Prabakesa. Yayeteku nimitanian ingulun mahyun ngwarahaken lawan kita kangkadiang amerihaken jaya marikanag payuddhan.

(訳：今、ビマはプラバケサ王との闘いに苦戦している。それゆえ、どうやったらビマが勝利を手にすることができるか教えたいのだ。)

ムルダ：ユディステイラ様、ナラダ様がおっしゃるには、現在、弟のビマ様は、プラバケサ王との闘いで苦戦しております。それゆえ、どうすればビマ様がプラバケサを斃すことができるかを、このインドラプラスタに伝えにいらっしゃったのです。

ユディステイラ：Singgih inganika Bhagawan Narada, lamakana maweruha anak warahaken lawan sira Yuddhistira.

(訳：ナラダ様、ありがとうございます。どうか、その秘策をご教示くださいませ。)

トゥアレン：ナラダ様、ビマ様がプラバケサに勝つ秘策をどうか教えてくださいませ。

ナラダ：Tan hana len, pinaka pamukya anak pwa kita angawe sira Prabakesa pramada. Mene warahaken lawan si Bima lamakana mundur meh-mehan kasor. Yayateku hetuniyan garjita si Prabakesa angawe ikang pangan kinum. Iku ta masania.

(訳:まずはプラバケサ王を油断させるのだ。今すぐビマを退却させなさい。そうすれば、プラバケサ王と家来たちは、自分達がビマ軍に勝ったと思い込み、勝利の宴を開くであろう。その隙を狙うのだ。)

ムルダ:ユディスティラ様、まずはプラバケサ王を油断させなくてはなりません。そのために、ビマが敗北したと見せかけて、全軍退却するのです。そうすれば、プラバケサ王と家来たちは、自分達が勝利したと思い込み、祝宴を開くでしょう。その隙を狙えと、ナラダ様はおっしゃっているのです。

ナラダ: Putran si Ulung Buwana, Wiranjaya mwan Buminjaya pinaka pamucukira.

(訳:ここでウルン・ブワナ王の二人の王子、ウィランジャヤとブミンジャヤが重要な役割を果たすのだ。)

ムルダ:この時がウィランジャヤ王子とブミンジャヤ王子の出番でございます。

二人の王子は舞踊が得意です。ですから、旅芸人の姿に身をやつし、その祝宴で勝利の舞を演ずるのです。そして、踊りながらプラバケサ王に近づき、隙を見てウルン・ブワナ王の形見の短刀でプラバケサの胸を刺すのです。

ナラダ: Nghing kewala, ri mangkana kramanira si Prabakesa, enak sigra-sigra Bhimasena anebas Prabakesa ulih kukunira yan kakarsana.

(訳:しかしその程度では、プラバケサ王は斃せぬ。すぐにビマがその鋭い爪¹⁶でプラバケサ王を切り裂くのだ。)

ムルダ:しかしまだ幼少の王子の力でプラバケサ王の胸に短刀を突き刺したくらいでは王は斃れません。しかし突然の攻撃にあわてたプラバケサ王は、神から与えられた力を十分に発揮することができなくなります。だからこそ、その瞬間、ビマ様が再びプラバケサ王を襲い、その鋭い爪で王をずたずたに切り裂くのです。

ユディスティラ: Singgih inganika Bhagawan Narada, suksma dahat. Mene sira bretya patinku pinaka duta lamakana jumujuk maring rananggana mewarahaken lawan si Bhimasena.

(訳:ナラダ様、ありがとうございます。早速、私の家来を急ぎ戦場に送り、このことをビマに伝えましょう。)

トゥアレン:ナラダ様、ありがとうございます。これより、ユディスティラ様は伝令を戦場に送り、ナラダ様の秘策をビマ様と二人の王子にお伝えいたします。

ナラダ: Mogha jaya pwa kita haneng lampahata. Ingulun bipraya mawali marikanang Swargaloka.

(訳:成功を祈っている。それでは私は天に帰ろう。)

ムルダ:ナラダ様は皆様の勝利を願っているとのことでございます。

¹⁶ ビマの指の形はダヌ・ムドラ danu mudra と呼ばれ、人差し指に長い爪を持つ。ビマの他、バユ Bayu、アノマン Anoman、ジョゴルマニツ Jogormanik の4つだけがこの指の形態を持つ(梅田 2020: 28)。

天界にお戻りになるのですね。本当にありがとうございました。必ず二人の王子は仇討ちを果たします。

ユディステイラ：Singgih suksma dahat Hyang Bhagawan. Byakta siddha jaya kadi kami haneng rananggana.

(訳：ナラダ様、本当にありがとうございました。必ず勝利いたします。)

トゥアレン：ナラダ様、本当にありがとうございました。必ず、プラバケサ王を斃し、勝利いたします。

〈ナラダは天界に戻っていく。〉

ユディステイラ：Uduh kita caraka Twalen. Enak warahakena lawan Bhimasena kayeng sawakya-wakyan Bhagawan Narada.

(訳：トゥアレンよ。ナラダ様からのご助言をすぐに戦場で戦うビマに伝えるのだ。)

トゥアレン：かしこまりました。今すぐ伝令として戦場に向かい、ナラダ様のご助言をビマ様にお伝えいたします。息子のムルダともども戦場へ行ってまいります。ムルダ、行くぞ。

【第8場】 戦場

トゥアレン：ビマ様、ユディステイラ様からのご伝言です。まずは敵を油断させるのです。そして、その後に敵が開く祝宴にて、ウィランジャヤ王子とブミンジャヤ王子は旅芸人に身をやつし、得意の舞踊を披露してください。その際にお母様から預かった短刀で、プラバケサ王の胸を指すのです。そしてその際に、ビマ様はその鋭い爪で王の身体を引き裂いてくださいませ。

〈ビマ、ウィランジャヤ、ブミンジャヤを始め、ビマ軍の面々は全員戦場から逃げるように退却を始める。〉

プラバケサ：Melayu si Bhimasena, jaya jaya jaya wateking Prabakesa hahahahaha.

(訳：ビマが逃げていくぞ。わが軍の大勝利だ。ハハハハ……。)

デレム：プラバケサ様、わが軍の大勝利でございます。ビマの軍勢は尻尾をまいて退却していきます。おめでとうございます。

ビマ：Mundur!

(訳：逃げるのだ!)

トゥアレン：プラバケサ王には到底かないません。ビマ軍の皆さま、負けを認めて退却するのです。

【第9場】 宴会

〔ト書き〕 **ダランの語り** : Caritanan, antyan bagia sira Prabakesa apan precaya telas jaya aperang tanding lawan Bhimasena, yatanian manglilacita anglaraken ikang amangan ngingum. Garjita tan pegatan pwa sira.

(訳：プラバケサはビマとの闘いに勝利したと勘違いして、勝利を祝う大宴会を開く。たくさんの人々が歌って、踊っている。)

プラバケサ : Enak pwa kita malila-cita, jaya ingulun ri kaya mene marikanang tengahing ratri.

(訳：さあ、飲んで、歌うのだ。今晚は私の勝利を祝え。)

デレム : わが王はこの世で一番強い王でございます。なんとあのパンダワ一族のビマ軍に勝利したのです。さあ、皆様、飲み、踊りください。本日は無礼講でございます。さあ、プラバケサ王の勝利を祝うのです。

〔ト書き〕 **ダランの語り** : Caritanan, hana pwa rwang siki wwang stri dateng ri kahananira.

(訳：この祝宴に、女性の姿の二人の子どもの旅の芸人が訪れる。)

ウィランジャヤ : Singgih inganika Maharaja Prabakesa, yeki sira kadi kami wwang stri sedek tengahing pahawanan. Karenga denku ingannika kasiddhan angosaraken watek Pandawa si Bhima. Ksamakena sira kadi kami pepareng amangan angingum maringkene.

(訳：プラバケサ王、私たちは旅芸人です。王はあのパンダワ一族のビマに勝ったとお聞きいたしました。どうかお祝いに私たちに踊らせてくださいませ。)

ブミンジャヤ : Samangkana juga sira kadi ngwang.

(訳：王のために踊らせてくださいませ。)

サングット : 王様、ここにいる二人は諸国を放浪する若い旅芸人の踊り子です。王の勝利を祝い、踊らせて欲しいと言っております。御前で勝利の舞を披露するのを許してもよろしいでしょうか？

プラバケサ : Yogya, yan mangkana enak pwa kita adadali.

(訳：許可しよう。さあ、私のために踊るのだ。)

サングット : 王はお許し下さいました。さあ、王の前で勝利の舞をご披露ください。

ウィランジャヤ : Ksamakena, yan mangkana ingulun adadali mene.

(訳：ありがとうございます。それでは踊らせていただきます。)

サングット : さあ、踊ってください。

〈ウィランジャヤとブミンジャヤは、踊りながらプラバケサ王に近づいていく。〉

【第10場】 仇討ちとその成就

〔ト書き〕 **ダランの語り** : Saksana, kagiat apan si Wiranjaya ngwetuaken ikang sanjata ri tengahing wastranira.

(訳：突然、ウィランジャヤは、服の中に隠していた短刀を出す。)

ウィランジャヤ：Eiih kita Prabakesa, sira kami makarwa putran sira Ulung Buana, ratuning Jonggring Salaka yan telas paratra tekapta. Mene aku dateng merangke bipraya ngwales patining yayahku

(訳：プラバケサ王よ。私たちはお前に殺されたジョングリン・サラカ国王、ウラン・ブワナ王の息子だ。今、父の仇を討つ！)

トゥアレン：実はこの旅芸人は、お前が殺したウルン・ブワナ王の王子たちなのだ。いいか、これは仇討ちだ。覚悟するのだ。

ブミンジャヤ：Pwahn, agung dosanta. Sira kadi ngulun bipraya umawa kita maring neraka, yatna-yatna.

(訳：お前の悪事を許すものか。地獄に送ってやる！)

〈ウィランジャヤは母から預かった短刀でプラバケサの胸を刺す。ブミンジャヤも自身の担当でプラバケサの胸を刺す。プラバケサ王は一瞬あわてふためく。〉

デレム：ハハハ！何が仇討ちだ？そんな小刀で輪が王の命を奪うことなどできぬのだ。絶対に生きては返さぬ。

〔ト書き〕ダランの語り：Samangkana si Bhimasena telas metu.

(訳：この時、ビマが再び登場する。)

〈ビマとプラバケサ王の一騎打ちとなり、最後にビマの鋭い爪で、プラバケサの身体は引き裂かれてしまう。プラバケサ軍はその様子を見て敗走する。〉

トゥアレン：ウィランジャヤ王子、ブミンジャヤ王子の二人のおかげで、ビマ様が、憎きプラバケサ王のとどめを刺しました。とうとうお二人は父上ウルン・ブワナ王の仇を討つことができたのです。さあ、このことをインドラプラスタの都でお待ちになっているお母様に早く伝えましょう。

〈終演〉

以上が、台本の全編である。

おわりに

本稿では、バリ島のワヤンの新たな演目としてのマハバラタの二次創作の実践を試みた。まず初めに、バリのワヤンの創作演目について概観し、その演目が創作者であるダランのオリジナリティに基づいて創作されているのではなく、既存の物語（本論文においてはインドネシアの古典文学として知られるマハバラタ物語）の二次創作であることを明らかにした。

つまり西洋の創作概念における「オリジナリティ」とは異なる価値観のもとで作品が作られていることを示した。

続いて本論に示した二次創作の規範に基づき、その演目構成を沖縄の組踊の名作「二童敵討」をベースにマハバラタ版「二童敵討」の二次創作を行い、そのマハバラタ化の創作過程を示した上で、台本を作成した。なお、最初に述べた通りこの台本は、ダランが一字一句を記憶して上演するための台本ではないため、本研究の成果発表としての創作演目の上演後には、セリフに加え、使用した人形、楽曲などを記した詳細な上演記録を改めて作成する予定である。

付記

本稿は科学研究費「バリ島の影絵人形芝居ワヤンの創作演目に関する実践的研究(23K00195)」(研究代表者:梅田英春 基盤研究(C)2023年度~2026年度)による調査、研究の一部である。

参考文献

- 青山 亨 1986「古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『南方文学』24(1): 3-17。
- 梅田英春 1996 「バリ島のワヤンにおける従者の性格とその役割」『Magis (桜美林大学大学院国際学研究科紀要)』1: 243-264。
- 2020 『バリ島の影絵人形芝居』めこん。
- 2021 「鬼女となった姫——バリの影絵人形芝居ワヤン・クリッにおけるマハバラタ演目の創作の試み」『静岡文化芸術大学研究紀要』22: 173-180。
- 大城 學 2017 「組踊「二童敵討」の演出論」『琉球アジア文化論集: 琉球大学法文学部紀要』3: 67-94。
- コバルビアス, ミゲル 1991 『バリ島』関本紀美子訳、平凡社 [Miguel Covarrubias, 1936, *Island of Bali*, New York: Alfred A. Knoph.]。
- 鈴木耕太 2022 「組踊について——歴史と作品・テキスト——」波照間永吉他 2022 『組踊(上)(琉球文学大系14)』ゆまに書房、pp. 3-36。
- Dibia, I Wayan, 2012, “Bahasa Jawa Kena dalam Seni Pertunjukan Bali”, I Made Suastika dan I Nyoman Sukartha eds., *Sastra Jawa Kuna: Refleksi Dulu, Kini, dan Tantangan ke Depan*, Denpasar: Cakra Press, pp. 264-274.
- Ensink, J., 1967, *On the Old-Javanese Cantakaparwa and Its Tale of Sutasoma*, S.Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Pendit, Nyoman S., 1980, *Mahabharata: Sebuah Perang Dahsyat di Medan Kurukshetra*. Jakarta: Penerbit Bhratara Karya Aksara.

- Rubin, Leon and I Nyoman Sedana, 2007, *Performance in Bali*, London and New York: Routledge
- Sedana, I Nyoman, 2015, "Innovation of wayang Puppet Theatre in Bali." Jun Xieng and Pak-Sheung Ng., *Indigenous Culture, Education and Globalization: Critical Perspectives from Asia*, Berlin: Springer, pp. 67-80.
- Sugita, I Wayan dan I Gede Tilem Pastika, 2023, *Lakon Bhima Swarga*, LukLuk: Nilacakra.
- Zurbuchen, Mary Sabina, 1987, *The Language of Balinese Shadow Theater*, Princeton: Princeton University Press.

『原典版 マハーバーラタ 2』上村勝彦訳、ちくま書房（2002）。

「校註 琉球戯曲集 護佐丸敵討」波照間永吉他 2022 『組踊（上）（琉球文学大系 14）』ゆまに書房、pp. 323-340。